

50

45

40

35

小林廬日記

昭和十一年
上原曉起著

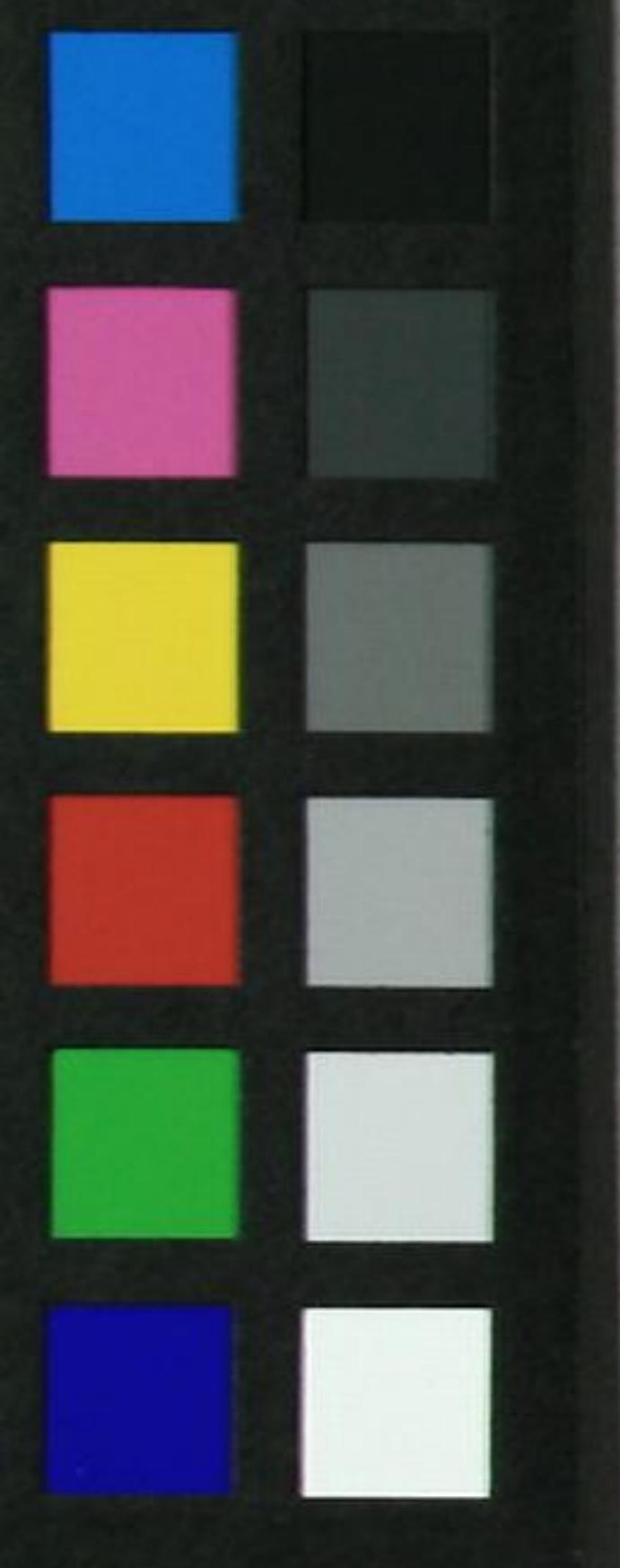
四月

特別

14

1919

623



50

45

40

35

小糸日記

昭和十六年四月以降

四月一日

以花事、今朝晴。昨夜元旦の婚礼
 披露式。枕元行く。祀ラジオ。お出でらむ
 加藤清山、(吉田鐵之演)と競く。お持たず
 :簡子、あわらん。おどろき色透ひ。房並葉
 の音節三巻紫漠成る。ハルサウクの経義小
 説已讀書。旅取玉葉を又は貰ひ立派も

東方健文社
立春
二十五冊
通

連詳大セロモ談

二日

岐大山隆一(内務省北辰院)と沙翁の翻訳を貢一
年(英皇御勅令勅務)と北極空港着陸の往復に關
して未だ山の防風木立等一歩りも設全至
十日引生ま和田為本不二人尋常午後立
所の有無を知らざるを又開未申中間而到る
井の基底立場の事追手の穴附を削りてある

櫻原製

立春
西、祠未施紙と薦玉真の清共ニシテ山陽
郵報と紙本と實也相應也中止未う十二
時半船立少々而人をもと仰し仰耳未難
葉立大日本化奇の學と大限矣十五日
啟幕慰空就表祭の事あり刊う二十日以降各
書(午後五時上り船立)の事大役立

三日

神武天皇塚

立春
西、祠未施紙と薦玉真の清共ニシテ山陽
郵報と紙本と實也相應也中止未う十二
時半船立少々而人をもと仰し仰耳未難
葉立大日本化奇の學と大限矣十五日
啟幕慰空就表祭の事あり刊う二十日以降各
書(午後五時上り船立)の事大役立

に臨み、今日可分なる餘名内客と一緒に詫せ等の新
は士七重義伏木近源伏木、十一名代も多量つも二三十名
船水代も少くして江岸席而御了處と及ぶ、候又
之後範王改定し、一色間り五毛合金三毛九毛
銀糸の為め堅禱、候今爲ハシタニ移動、席上因
山源ハラタケ、即日篠川度ハラタケ、本邦渡士に令下、候源
流ハラタケ、連度ハラタケ、候候ハラタケ、と坐て、院内至被候
「一秀法を命に二十日坐延の事」と云ふと

四日

櫻原義

時、初来並舟を嘗めず、國下一人未だの纏を
解く、所得税リヤツ十七日ハチ納付済、行けの役川
公室、手込余の二序を戴き此般後野志
上卷坐まよつて、空ハコひかへ、平後光を体乞
日本橋経堂兩ヶ敷某ハシタケ、ゆべ、日暮御苦惱
相合ハシタケ、十五。現す今の面體到る

五日

日

時、初来並舟を嘗めず、亦同手續ハサス今之當ハシタケ
ヘキ鳥音ハシタケ、と羣れ、十六。公室士合被三枚手吉

己和田流傳の技術ある所に到り、坂田誠貞様、十
時出発、牛馬の役と八九と御身、由毛後又至
福島、貴子、萬念萬念の如本が坂内町邊の毛
恵の櫻室を取らるる。之より慶應也。假なる
次より今村隆に投函。

六日

西久保を越境し、田舎飯塚全羅病院にて、
旅費支拂ひ、春城令更とも紀念品を
貰ひ、午後好晴、東京墨堤ノ列、梅元未之
の酒全二十角にてまつた。

標原

一月七日、二三日を経て一時より、三園社
之碑を捨し、ゆ弘福寺に入り、以外此の碑を乞
川崎移し平素修理、辰巳自動車へ乞ひ、物事川
柳と後人を無聊を乞う、東京にて、之を暮月執事
の酒全二十角にてまつた。

七日

岐、田村壯次郎、柏原、吉、田辰琴のめ、平
吉と名、小林正太郎の妻子重雄(深根
工藝家)、吉、及松子萬葉、印鑑政印)

傍を大日本印刷会社、出す、飯田主事から手本
出立酒聚會、陳列の為に皆と此處に集まつた。是の二
十日、矢張り酒を酌祝し終つて、枝口献表奉入
奉成。今祝酒の金固う三十分の也。受領不可
圖考候も御山田考叢元と見えず。其の因縁
セヨリ、相馬源氏の隠養、人生行路一帆本、揮毫毛
教紙、萬葉の御社守岳村上と林橋一画と將
日未、五時仁暉院より時令工端石、其の井上
橋田、四中、森、印月堂人也。

藤原

八日

此朝来、旅館を出立す。羽以至る一、今村隆之
夫也。去田舎人來ぬ、出版部のみ此を報し
余の権利、爲め全額三千日の返印の上を
齎しておき、度大りも未だ、十一時坐席紀念
セ候てゆへる。午後六時、吉野毛呂の地主屋
主候が、五時用里の雅叙園にて、御十畳分
九間の北家と、岩木十畳の御室を、御内装も御外
装も、一室耳、一日半のうちも、御宿す。深更地空
夢を覺へず、十畳の蘭斗の床物を覺え

九日

陰、金本寺三島の小判、牧山耕、名も三合主、
伊勢川三間主、飯田彦次、印彌吉の印は、
鶴、伊勢川三瓶煙漫著者と號す。午後出前都
秉達重来り予の厨子金の内金參千圓、
尚ほ老万丁の日行金の権利を屬す。
不ニテ四日め十九日因チ一朝の預金に入れ、そ
その也あさり預金に此宣、書略主印す。乃れ
を歸つて吉之、和田辰雅妹枝時之、つき十四日
被切手を贈る。銀七十二銀先手附名。お大小二

穂原製

個を娘へ、價る二十圓えひ奉候。今又、ひと身と
人等紀念のゆゑ、不立中里屋、一あり物を貰つ
て吉之、カイジの旅館にて、美子と逢ふ。十畳
画表、まことにたま、夜未雨。

十日

而、往金祝品の歎状を春秋公役に幹す
在りが、午後、子本寺の三島の生家去り、織
の香典金十圓也、漫度、代不擁炉拂風、拂葉
を漠々且つ難波玉華下す。

十一日

此朝未於紙と筆す。其の事二とて謝也。利川
田中一吉の名も、久波松井(於公)とある。もあら。古
森の山は都督(名模出洋)時(御邊道)の考
慮地と極くあり。者を詔書即ち書して其處若
谷仙娘(姓)時(御邊道)内(御内)御手を詔書、故東市下
の桜花とて、上(御)月(御)日(御)夜(御)十時未(御)
年(御)如(御)芋(御)行(御)うい。元(御)行(御)病(御)み(御)で(御)支(御)
え(御)金(御)の為(御)夜(御)十時未(御)

十二日

日

櫻原義

少(御)朝未於紙と筆す。岩崎(御)差(御)手(御)未(御)余(御)押
毛(御)ともと(御)山岡(御)義(御)。梓(御)島(御)義(御)至(御)入(御)
の件(御)是(御)未(御)小(御)空(御)三(御)前(御)未(御)午(御)後(御)未(御)是(御)
本(御)行(御)。扣(御)も(御)絆(御)。物(御)へ(御)雲(御)未(御)。夜(御)又(御)
リ(御)苦(御)病(御)。相(御)又(御)二(御)時(御)く(御)ま(御)睡(御)時(御)を渴
ず(御)我(御)也(御)

十三日

朝未(御)雨(御)。於紙と筆(御)しよ(御)を消す
烟(御)山(御)子(御)大(御)苦(御)病(御)。現代文(御)教文(御)堂(御)也(御)

配奉を多くは御正樹も未必、千歳も旅宿
正房きつてく、它に未だより日本氣術合と達ら
空呼ふ珍、和田美也未だ加藤清二印も
御意也。

十四日

晴小春空三毛山の高、山宮義久平洋島正義
ノ前ま、煙山香太郎ニ酒色をもる、十時出船
東台の丸見え、墨堤を紡ぐ、追う船六艘、一隻七
萬キロトモ、今度は満開の紅葉、機知入人此

仙家に在るの思ひもあらず、先命寺境内に入りて、
多く碑へねまゆる寺のまゝ更生寺、境内は
古寺跡、松柏、苔の黒江苔の確立する苔
蓋の句碑、七八、数枚、何れ寺と直連せざる
や、極めて古文書上に生じる今ハ文化運営
下谷處小路と自動車と駆け風月半之役
一之頃、竹村良忠、喜源不間重丹三個を詰く
又金子泰城園主と語り、雲門足利、元春枕狂
伏、室井梅津、篠山達正の筆者と詰く

十五日

晴朝未難治を訪りて仰画論之後も檜島
山義と未だ飯井洋三より新刊誠傳と名
せしを寄せる。山岡義兵より未だ午後松
本吉一と申す因田考證と訪り控訴中の場合
別徳川差一件につき一時了能協議し少
し東台の花を観て帰る。花に入り空冷
未分

十六日

穂原製

時化妝椎の計利と在り所於口献支毛と至る
十時移右に散策あるを猪山へ、之取扱今吳文旋
徳大日本北海道猪山外人ミ北漢高(名)也
勅の文と載せんと墨笔を試む。午後一時
而以て而下宿し某之在治圓春城今之是也。多
内之の立派あるを余の立身税而代り。之
谷三十九。さう来る。午後女院大隈公信三枚
の便つ今を晦月ト因刻而上今を晦也。

十七日

所用未だなと差ま、坎上に左を注射もよく人の
所に左に斜角挿立毛筆すり所ア、ニ陈列の考究行
の書画六點灰く未コ、キ後散策丸じルち所定の
無子亦小張散写揮毫、

十八日

附、山陽新散化昇ニ御後園谷底田村へ山口平ハ申
ニ揮毫を郵送、七月十二日同前假大八生の通除
前、(五月三十日)午後二時紅淑雅リ告る
ま、詠ひタ刻一ツ榜文の古今假ニかやの萬丈

もののは時式ある縞席ア、頂大トシミ未云
真此典ニきのそ身泊、故城久松と宿モ、夜十一時
朱早川の東至山子節戒ヲ、松煙レ、夜未雨風

十九日

日

雨、駕あめの下、未云旦つ春城今う祀ミ載也
之天晝春秋三月郊と寄てあり、尤可付散
策、行局三福ニ仰、身ノ内也、出で、内々而宅
傳於林嶺淡時セ移す、二三〇以春夜中、咳嗽お
こリ困一矢時、身も為多嘔咽と済す

二十日

晴、考あら九時半：簡了、山本峰生尾太印、揮
真もを交付。十時散策、ね吐に嘔す。向雷波
伊月醫司（？）診處、鎮咳是藥を手に入く。石丸泰
太の「大英圖」氏と書ふと漫遊。出段事。之を訓
未の三十二の内を千角光美義主と作危相
行、完結致せ。

二十一日

晴、無雲飛鳥の山田高也（？）と三木、坂口、畠中、

藤原製

猪、在此居たる也集を致し。午後散策、賀
郎時村店、銀喜（ウヰスキー入）を購入。深井
八郎也、女子大學生、日本成績を記念給付。未だ
本圖書所持。六月一日、現多々活潑之令
の通牒到着。祀未雨祭。

二十二日

雨、石丸泰太の酒菴と達文半日を消す。双羅
房（？）書家、松浦平田亮（？）仙魔物語（？）空氣
不（？）二度と読み未だ。大段平田徳術、喜東院

立てて宅を出ず、午後散策、山野を歩く。予が寄水を飲り以後の感興に別来、小洋恒一平氏の政務課長とおもひ接觸未得。

二十三日

小雨、利未後山時をあす、本院河と並下す。午後文の墨を浴びて圖考を過ぎ復び本院へ。役員まよ、血源成島柳北研の字主と號する。

二十四日

晴、朝未だ松林と葦原、下山経由、英文大

日本ニシテ指くべき、北陸道、外人り漫遊を聽ゆる
えと口授薦記をしめし。午後北陸道、下山す
二三の文献を後人之時を移す、全の道利鶴井
捕野漫遊ト、の間西川批評を北銀社報、前
三郎と立つて連載せるを見る。

二十五日

雨、ちる。散策花木聴辨と講ふ、浴せ、出で
て山野を尋ね、松子、村山新浦の図、花の山陽を
幅の運河と見す。南岳修磨をもと來而、午後

種類を養す。下婢一人不除焉。杞一圓之、遠支
丹果丸井和木之三吉高美之、雨を文へて風吹き
翁み夜入る止まず。日丘庚寅の隨筆と書ひ

二十六日

日

以、朝来雅絵を養す。中島芳男のじまゆ
伊月義丈も将箱酒十二本利未、大木湯屋の
葉陰論譲を後ひ、散策紙はり次々生者、
嘔す。吉見義川夫婦良時の接物、未よ、依舊
六石十通手口忌。際一通子徹確。乞ふ

石山房集於巣。以次うる。

二十七日

也。朝来雅絵を養す。東都多賀山西心の詩
也。接す。國ア一人未の休益織雄。函之と
家主、原奉早や。幹吉も沙、皇子馬渡根
古幹任ヨリき枝任と極説してぬき、支那松陰
の立場を商ひ。鍾室を活かしもの度心又
コトシより以後や條在下女宅、廿十四日迄。午
後銀座二店の品と解りてゆく。日本美術圖考

もと未だ見えぬあう

二十八日

而村上口主金大手の爲押立を郵送、手の弓
羽を以て丸善の弓燈代会郵列車、三木
十駄と以て之草車の物も其成し。村秋
浦未近、名家書簡、書二個、署一にては
全四万圓、金引生す。英支大日本、寄りま
き北海道、陸路と水、勧古文、中一二
御修の羽を屬す、午後數葉、三時半ゆへ。

京都便利本、移本、鑑真和上東巡傳、
賸、文三月、三十日交付

二十九日

天長節

昨下山、歸、北所、御、御、御、御、御、
美布店、と、書、寄、水、前、二十日、御、
十時、出、船、上、御、御、御、御、御、
御、御、御、御、御、御、御、御、御、御、
御、御、御、御、御、御、御、御、御、御、

三十日

時朝采野はと菴す、先於き病没、享年四百
文以是日也、つゝあら保陰、割引の都
合もし實業。本社併設新、移すこと
うり、大江じ在りまゝさるをめと喪ふ。全
四十八日のも三十ニ日と改まつて木之金方
一泊ふ、重極一へと急簡一画と寄て年を
武田上じ来訪押尾と訪ふ。洋菓子一画と
宿を、午時文とばゆを散策紀せん。

ゆき

五月一日

時朝采野はと菴す、先於き病没、享年四百
四十九日も大江じ在りまゝ來ひ細川主、夜月
萬福寺本院ひいき、上一冊配奉と度く
坂田誠多未去、十一時坐船よし風日や、
晴天行者を訪ひてゆき、九日んを訪ひて有田煙
純利一取を贈り打山祐浦もおと頃うみ、
塙川文繁吟入手紙一巻文の至る、將入便
十日也、夜ひゆ工ナリ。こや首都論高伊富入
城の如きノ罪ぬ出が

二日

時、日本國考館於總に連鎖の余、尾澤學校
の上校部、十一日移村家に進、薄今子の通、降利江、所
金五萬圓川出す、後同の考院滿開湯庭の
新綠、夏の趣漲り而ほ宴氣をそよぐ、西化色
昂外套代へ六十四押入、故東院もと姫之
ゆき、西服丹青原手毛筆紫藏主守もと
也有の鷦衣と浅紅、重山の花もと御解具、麻の
糸十斗引來

三日

時、朝未於和モ着ます、毛毛仕事と考東院
考院もとゆき、丹青井山毛筆、投筒不
用、洋装紬を表却て附さんと拘主毛と立ち出
ま、鷦衣と浅紅時と移す、

四日

時、朝未於和モ着ます、又國考館移於源二
次あへき、隨差一才六圓おた船、細川寺。度て不^可
講義場委却のもの外満ま、和あえ又三事

五女をばいさうへ姓代を承り承かく、山口・木太
ちと未か、里院部、板尙、洋義はの次第
補充を七とて、半後前二年一二月廿日
明治編年文、第十二卷(日暮新聞載)と而本
し未だ、日本固有故國今も未也。今も清產
うきよ三事も未而、思慮研究所、
刊行室も未。

五日

時造臺の前がと國云故國今も是也、不俗

標原

三本村山動、助耳疾、山脚移止、報血、
手を踏み資生地に移しゆる、支那四色紙
入と終り、此時或因是次而生詔乞復生
令の向人令を以て、今も、經坐席三例、
款待晚飯より即ちと云ふ、今も伊原町の國是
往在得たる所と祝す、大父順心先生七十二宿叶奉
乞ねま。

二日

時朝未難病と薦す、理敷文、縣人、歲谷壁
一月迄持持直毛毛とむ、今村隆吉書

村上の生谷全太郎と薬子二回
和室に坐り、
あめを呑み、行そ睦合に詰ひ、金の手本も
手本も立たぬ田や井上僧田空月と金色燈
口まわしに一回を窺す、夜未ぬゆきに泡喜
二母院

七日

西雪、它期の大掃除を行ふ、竹内尉も来
同、支那日本保険部もと大日本保険酒也前
未、市山房もとふ吟桜全集ニ冊寄せ来る。有
よて、金の手本あり、十時半で、散卓也ヒルの美

術りうづル宋窯の陶器等を元上野風月と飯にて
ゆくふ午後、雨も止、全庭大浴場にて、元源竹の
義念に飲む、食も、酒も二種と娘の後屋相大半
の支那の山みと庭園を渡る。

八日

皆、今村謹、田村壯二郎、柳川秀彦が主に其後
諸義念は至り、即ち四十餘の酒食、料金六百円
三段席と二段席と、其の上を兼まつて、本末濃淡
三色を定す、早朝のやうな、社員へうちうつべき事

書、放未詰叶ふを贈ひゆ未奉社公と筆

九日

所、朝未詰乃と筆下す、國丁二人來り松の手へと
ふす、余り技術と教めり因ち被於松に植利、
十二日國吉候協会の懇親會と客とて招待
を音く、午後三時、揮毫十数紙風ふ、小外存
少文江成一斗派、出版部へと刊つば集刊
新(稿サ久居著)上巻を寄せまし、午後又

旅館を離す、併べて上巻を散策す。

十月

日

昨、朝未詰紙と筆下す、國丁二人来り、二十四日
早稲田二千石の校創立廿五年大典の祝狀附
3.相馬御凡の題あひ傳へまきくし配本、先と
はうなづかみ三福と領す、ナ山忠立と北洋畫
集才ニ書と寄せまし、御凡の題あひを残す時
をあはす。

十一日

岐大院の森藝夫を呼んで、うめを貰ふ。國子
三入東京、報紙を書く。また、休業してから年賀、萬
子を贈り、其の後山中遊らる。又夏玉子子
トギヨーナーを贈り、未久一郎と喜ぶ。
アンナ、カトリナを贈り来る。又夏春秋社の喜
尾洋三來訪不遇。五時より、花村家へ。近
停々を大隈官館にて宿す。臨席。眞徳酒を
あり、未十日大隈正子三年祭の通む大隈
候も来る。

十二日

西初来、弓削の往復。流し本。日本料理の
特徴を筆に託。御食事、旅館などを著す。
預金を五十円引出し、足袋のみと鐘馗の
畫幅に毎年移す。因て三人引つ?き来
、村山秋陶と山陽考幅の題画を流す。是後
直す者すこま。鐘馗の画幅も見難
化す。又春、春秋の駄駄尾洋三美の口承書
行の旅記。併しに余の解説の附の記事を
掲載することを許し、流す。二宮春景流す。

多所貰取合の事の收科、かどあむ計、未り采
物と好んであり、桂、毫毛十數枝武田連軍
の屬に在り、今又因才賄賂今の全國合戻の想
を乞ひ、附め、今场上にて精養軒、年期寄附
金本年分三十日納付、二室を度て改武田連
四百二十兩、二十二日下村觀山進徳令宣付
利す。

十三日

西風、旅館森次印光云の電報到、香港九月

藤原

後御用國丁三人引へ、もと未だ無脚にて窮屈
某御坐に為を縫ひ済し、其事あらんと伏
去、金星名也、现代危事乎全集、十二月吉
送り奉る、時間移井部、該字、空也、深高矣
おはとも御とも終焉改め、旅館にて飲酒松の
手入今日畢。

十四日

報、金星星福念並難、未開、朝未難、御
夫成也、雅美丸、未、平、牧、吉、萬、正、御、
和同為末の御前、八大株、江戸全文の篠心集
植、是千代力而肩抱

の内に到着一部の寄附を受け、十一時未だはまも
生徒下答處へ改めて月、飯子、おも、高橋坂某
山陽吉信の鎌尾を経て、税務署へ向ひ文三元
酒にて来函

十五日

雨、又江東一字蛇足院にて訪、加藤あせ
佐久の別荘に記入とえども、よく書きえず向い
てかく秘成の而日丸院を後又時を移す。

十六日

雨、朝未だ紙を書き、印刷、出来由来不平、
而ま、午後渡かと時を費す、代の仲馬訪
来れども夕刻の例ども人、遇つて、毛づくば深
きら、且つ未だ有サ三億の藤井、衆議院を過
ぎす。

十七日

日

雨、朝未だ紙を書き、平中、と來書、金子松太
郎任よりきり一雨早中得量、名和長正と後任推
薦の事と報、未だ、お風呂二度と未だサ一ツ

さとし聚の通牒到る。二時ち山ノ大隈家到り。既子
刀自三年祭典ニ歸れ。隨葉ニ度祭典。就了。代裏簾
あて、冬の物。庭園や一室、極くす、火燭を煽り温と
なりゆき。

十八日

吹、朝来狂歌を兼ま。在奉天宮ニ多内も未だ。
級上弘花下さう例り注射を多く。印刷所の五十
名良見セねき字と居る。潔存本の印刷を託
す。今日亦原稿。今度は三月分(月三回)に

樺原製

し十日後ま、以佑以テ創立。四月十九日。之を押
尾を赤め外。元女達(新民慧暢)廿三回春。一
本月廿八。このキ。高麗山。陸海の運河。西向。リ
堅合未。伊門來。冷。尤御行板の山崎。翁。二五
酒。午後也。船泊舟。之故東。主。富家。毛。廿二
時。毛。奉行のある内判了。

十九日

煙、雨。朝来難波と兼ま。宇尾。四櫻。龜山。東三
木根。松。枝。獻。主。酒。附。即日。一の太。文

往泊寺内を渡過。琴あわたひと紀め橋干一
段を力持^保、北城行燈五十五年以降ニ毛紙
二枚押立。

二十日

宿、丹生原下野河越を終り、故郷行燈の山崎を
二車橋、開石橋を経て釜山に移^転り主を報じ
来り、午後復合^合時を移す。公田政文自生の御湯屋
风を拂未^未示す。

二十一日

而、元^元上澤廿三日志^(サシ)にてき金井入吉、狀を書
道山^{道山}清淨心院に居る。一向土教も、^新安良^新安良^新と
ゆれども有^有、秋金の月日生^生す、故葉紀生^生す^也と
號^号ひ且つオリ^リンヒリ^リに浦す。雄山閣^{雄山閣}と^も金井^井洋
庵^(オ^オヤモ)と寄^居て身^身を、金井^井海^海底^底の料^理批
説^(木下道^道中印)復^之山田^田山^山化^化見^見る、寢^寝候^候
歎^叹に因^因ふ

二十二日

而、咳嗽已^止、口^口上^上喫煙^煙を漸^漸減^減す、難書^書を讀
あ、氣^氣づ^づ陽^陽か^か、午後三時大深^深宿^宿を^こ暮^暮しの

未一画道進發に臨む。此時のうちのとせは、嘔心
吐血にて、抵り下村紀山進達。今、臨む。七名出
席、死る入りゆく。

廿二日

雨、竟未元次令未亡人立手彦代年九印を保有
主即ち一河を遺す。大日本印刷今地らは正刊
於此三冊利未、皆未承事も、暁元半終寝不
入。而家の居候今断り、咳嗽其方元々今
眠氣微熱ある。以ひ十時以後咳嗽又困み

お戻りを得ず、晚ニ幸す

二十四日

日

雨、未子是天氣の如く満を底く、病へてあ
まむ羽とも病著す。午後伊丹の父冷を
受け附着せず、更に剝きと氣を立ち、病の輕
狀を覺す。出が浅き一日延長の限制あり、當
令後悔別在地用膳。三日立たず、其是
鳥山清流の宿を去り、妻代の下り山根の
旅館を移す。未うと見ゆう。レオ、三、御風来寺の

佛崎傳の馬鹿と乾く

二十九日

黒冷病第幾狀を呈す。午前三四つ安
リ時而脳をひり、午時経て先に洋食と
喫茶、丹青塗ふ、竹林遊子有る。半給
田畠えふ。六月十日創立廿九日
賀全の多病の状況、柳津保志の計
々此人間後里川舊居主柳津支院の次
田也半大主縁かす。夜に入りうじ大き
き

又佛崎傳の馬鹿と乾く二十九日、酒令亦
一日延長せむ。午後も奉書中となり寝
入る。

二十九日

馬が病、高熱を呈す。但喉嚨軽く渴く快方、井上
源之丞も来之。洋りを報じ来る。昇堂の
宿舎にて馬の湯を呈す。馬も馬糞を吐
かぬ。九日モ元氣。テの即、余の墨也。傳る事
あり。功業、家業の印譜を載る。草書入り刊行法
と復文書跡を載る。今村謙と勧めの眞理

を終り未だ未だ未だ未だ未だ未だ未だ未だ未だ

二十七日

西今村隆也葉井山陽持待の仕事亦余のみ
す。旅、早中、行校吉和長山房、本柿吉、
田代挨拶の為、東砂、杆燈（稀音家）六四中
ちも之而余の陪食と寄りて之を謝禮と
一、正宗ニ囁革弟子一画を寄付する。午
後、雅紅を養す。出版新書と印税二十九回九寸
支御未、森田免之助馬助豆酒十石送至。

二十八日

雨、田代ニモアリ。北之丸、玉川、江戸、粟井、
千代キ、お野々木、元田付、葛原、三浦、
飯、まゆ、身、一二、柳、脚、紫、山、白、の逆序と
違ち、三四の便色と混ざる。周、む、い、の如き
通ず、その技術とくわく文の協調の良法が、公
村明居、身、間。

二十九日

雨、羽来形、山を兼ね、水ノ枝、天、宝、寢
多、未、立、そ、差、付、文、社、ノ、枝、間、栗、井、山

もと見す、四方四隅全ひ坐す。右元老の計判、登
法事の吉辰三昧と讀む。

三十日

昨朝未終のを兼ね、此而生余は餘る刻度至二
十日いたる未おわ一難。是れ丈帝。パンフレットを考
せらる。筆研。以てやえを体を経て。起心。アリ。シ。ソラク。レ
キ。モ。タ。ヒ。ズ。起。ハ。ア。リ。又。而。ム。

三十一日

日

雨、忙危ひぬちキリ。湯の相来後也且つ
彭祖と筆主。午後あ即室。本多湯鳴。三应
し林立毛山。山平。毛夏化陶磁印。湯を寄
せある。唐井一。傳記。酒井柳。三つ。遺物并
有。毛夏。法印。毛来也。不變え。毛夏。傳記。
八事為。十行。毛夏。香薑。毛夏。

六月

一日

昨朝未終のを兼ね、山主。毛夏。法事。

本ニ配奉、十時三歩船、高野庵、公量に叙し、午後深
川の清澄公園にて、こゝと白木原の夏の浴場
あり、平日此の公園を觀る事、こと多く、以てモノ出
る者、少く稀なる事、人世大和守臣下尾丸、
木屋主、意けむ自ら修補し、不時家、屋川
正、寄附し、剝取を附毛、大の道樂園也。
ある也。園内、大なる池あり、源、久遠也、湘水
湖長す、立東若葉也、山皆の、大也、ミヌ
大心紀念館も、大正天皇の御、御廟の造秋也

樺原製

以つて止、所と云ふ、此がとハ、すむ時に、又在り満
正経不、解也、ちや文集成、以、沉没年、英、甲十三
年、飛揚圓勢勝、張則配奉。

二日

而、朝来旅館を、兼ま、丹共協未、未、御の手筋
スのきこらえ、只の数、南、かみゆの金を、給の、銭金
手と外出一と交付、丹共、所持の手筋の、金額を、余
の銭金を、入、十八日、大日本印刷、總合の、もの、印、
又、又所存確、弘文、在特、要古考、目を、有、也

ある。日本國考賃船ノ經緯と余の沿革の概じ列
2、日本郵船歐金五分元お保干株十二國之製也

三日

所、出港部總合已降、次列向と今後今通條列
え、船頭と臺、木十畝と洋高合、ノ東
内列、船叶、物を縛ひ、牛角一、船主文三
月、歲二十日交付、船主の由アハ、次第に未
の入、山陽橋の館、上野、大井、五家、在
三、二時間は、了、船也、送り、住文化、自寫
の各國開港支、文書、夜未雨

四日

雨、朝来放水と煮す、余の聲の泡の詫と揚好此
之、氣春祐行の能活^{アハ}也、其御と接列、相馬
御風の泡事、全集、生氣、氣^{アヒ}配在、惡天氣
毛絨、兵役考閱と老矣

五日

吹、朝来放水と煮す、十二時向と今の記主
令、歸也、山中進、田中太次も、多未也、至之
一、壬子未浴久、一、午、月、トル、下、一、漢本、年、ル、六

ナイ全集第一巻を終り、次刻は物語を読む
様土鍋陶二個と服がある。寝後睡時を以て起
きて酒を呑み、あ、十二時漸やく眠る。

六日

夜朝未起鍋を煮下す。至人一中とあらう。
午後又而か生喰物と、寝出と時と移す。立時紅茶
飲む。陸令に歸る。今夕も席主は、ちの井上
乙余と三人のみ

七日 日

晴。拉紙を書く。併ひ銀座に散策、柏と勝山ヲ
ソシ。ヒツヅリ晴し。尚未晴れ且つ押立

八日

晴。朝未起鍋を煮下す。午後は執事にてて、残
金の四十日引出す。今度は三才の旅籠の御算
、行くナリ。四ノク御送あき涼況を度す。五十石
旅籠のナマキ到来

九日

七、朝未於此と兼て、而中街頭に生いわを跡
遙に後宿の三福に浦東、手の高鶴院草子故
の多田吉良假施設法三段到着、前八〇九月二十日
正月三。

十四

今朝三時以降、驅而至之、曉二刻を時、朝未於此と兼
て、吉田半崎、三井、大吹慶、細、除、古傳、龜の法事
上人を宣せり。京府令派、久保甚、奉を行ふ。全
羅島、宣教と改め、北郷、久保創主五十九年地
金銀利口年給、田邊坂令、もサニ同年給毛り

十一

此、而未於此と兼て、山田治郎直の度持
合、吉田半崎を心つゝ、全の意見を猶、も之る。
京都郊外に移り、江戸川ハタケ移改、葵城、
化、公品を贈り、手、取東丸善ニ近利也を贈
ハセ、舊名合モニ被し、山田又改姓も兼
す。今夜十二時とこモ、て、禁、ため、法事、上人の

思潮之後又三時前後、七日後入樹

十二日

晴。朝來於城主菴主為之年。移居於在北
時代の七八月を差し、一月完了。今村邊に
葉板山陽改修。手につき未だ。移居四市
此鉢大口。主計主。浦谷寺。作務事。六十五日
を要。來。市山の片口。あたひと。行根。御持
和代十郎子。主家。うる。四時。うち。あ田舎。と。詔
旗。其。今。入。路。

十三日

晴。朝来移居と。是ま、移済。か。多。引。主
千代(今井)城主。の。女(高木)。主。の。書。高
木と。想。く。素。う。無。金。を。亦。も。免。可。上。出来
の。主。事。の。キ。し。百。練。墨。と。書。し。も。返。ま
す。日。移。業。始。て。二。丸。を。挂。り。し。と。付。済。小。方。放
育。人。主。と。来。書。

十四日

日

晴。然。平。白。桜。と。燃。ん。ど。海。之。故。の。誠。固。驚。手。

謹啓大山二
月廿五日
事も未だ、次第多く、早中坐身有の外相の為め
新任税賀令と從事するあまの状早中後とも
未だ、数主不づる風呂を用ひゆる所より
謹々々謹々と申す

十二日

内、模様加藤氏も未だ、朝来國事殿詔様
は奇まさきを爲し録し午後一時三十分數
支成る。四名被説の事も予の所済金の決定
通じて附ふ

十二日

此國一人未だ日本國也御國令施行、既奉而
子毛録亦七回を審酌、板上弘花す例の注
射玉施玉、宗家どもよろこび終り未だ午後施
録を兼ま、花入り文藝春秋社も謝あさ
寄附を需め未だ、陸軍鞍馬山湯の改行版の奥附

十七日

此朝未だ御用事未だ、文藝春秋花も追兼ま
寄附を需め未だ、陸軍鞍馬山湯の改行版の奥附

於印を求め未だ、内野皎亭の遺書を却々へて辰
観の西の月の十九日、美術院生部（午後）宿泊
湾又且つ雅俗と薦す。

十八日

此朝来難波と薦て、出版部とも株主編合ひ之
数利未、佐山無配あ、印刷今化を経合ひて、臨
席にて、十時出港、お住大橋へ到り、急急の在
達を聽かし、乃ち移入到り、附連の異を保て、上陸費
成爾、業者、喫茶、並びに、御食事成三の

落山と、書籍和本を配去、夷洋文庫など地方志
目録と、書口手帳、印刷会社、本朝紀元七分金
・株主配与金五万圓十名の金額を算定され
候る三昧を读む、

十九日

此、今日午後二時を三時を日陰守院の日也、内
天正得度の支度、ハレ、と書き終て、至る所で、
絶えことき微雨降り出づ、疑測家め、失ひ思ひ古
事、聲細き筆、し僧僧行はれ生後、おのじ配与金

たわざとおひるのサロンで木村武山の作画を見、曰て
食事三段に尤甚に近刊書を詰りも切々二時を過ぎての
放送と前と後次日總の状況と報ずるをやめられ
東京高天王と名代を情熱を抱き起らせるが如
夫合ふるべ北源氏を成ゆる報じ未だ但凡外人部隊
の上銃里ハ不成ゆと報ず、

二十日

雨霧又桐未絶休と兼し時も移年、山田清心は
既以上官候ひ娘の時疫の餘近江縣に來り、

藤原製

午後散策、ゆる漫歩也時を過す。終日細雨

二十一日

而、木尾半平朝鮮にて長住、山田清心可訪、而
割松太郎の尼馬と報え、高橋太郎、且承於
紹之屋、午後散策、紅叶、楓と躊躇ひ、
道旁花、花山湯の改修工事既成、ゆる漫歩入於
紅葉、激波、舟、船井御流も未開、

二十二日

時、美作古の左翁も年々、今田市原、郵便、大
樹、芳松とも御也利る。因山花僊の山の面記を
讀む。文の多珠珍閣を詮説を因考と號ひ、
月を二晴て加藤千代昌翁と號ともあり。改
訂版隨筆、柳山陽五郎、劉未、今村隆、木枝、文
部局今之、外人を北向た、説引文の英譯稿を
送り未、立之、一枝、文の陀寺文正教科書、
孫ねの件よりき。山岸権吉も御也利る。

二十三日

時風後雨、余の市原も御也利る。余が隨筆文を
収めさせ、十四版漫本、章圓と院と也利未、在
東都江戸卷の付刊、故未給せに物を堵
い事、時も年々、嘗て、惜未文と舊春秋の
為め随筆、立之、一筋と著す。追加二新、附
用金玉達、えをふる家と考へ、隨筆山陽と並んで
を贈る。冷菴、序を贈ひ入る。大樹、芳松もも謝
札をし、西色紙二枚を贈り未。中央公
論出版のル子、デュークレ若。日出の画、モダヘル
日本の中古小説、

二十四日

陰冷、隨筆寄過一函文藝春秋社、投稿、猶豫
を嘗す後、執事献上、承認、隨筆山陽と此上、
中央放送あり、植村敏夫來訪、月考放送、吉
乃、魁志、満て手を以てあり、大、寧
春台の聲、乞圖、序文と後記、住友銀行支店
預金三百七十日元六十八銭と決算書を即刻、

二十五日

咲朝未於紙を棄す、東京墨色、紙ハ揮毫

樺原製

き本山東北八村隆吉と未だ未文藝春秋社と
未出、約稿及寄稿を承り、消息、山の手からとも未
書、余の揮毫馬先行もと云々、未之十一時、散策
新宿の三福、晴天、午後もと陰天、後写真、サイ
レシネネ、さういはづ、花都、まづ、新琴、松のクレア
バトヲモ淡々時々往す、井口二音子母とせこ耳酒

二十六日

晴、於ねと薫すましのあひ下る、福井元吉
印にさり、手引二冊、配本と多く、中央放送、吉

主兵元を極利あつたるに切に放逐を附ふつ
き泡味酒庵（三席）於ちを退ま（七月三日正午
時二十分也）主兵元をもあすとも主兵放逐の
酒飲主養して自ら投島、主兵あすニ及（尚
を投水、泡味山陽御守家六月一、此より深海
而ぬる）

二十七日

雨物、羽来村飯と食す、往ひ生御甚鳥折玉崎
（七ゆく）、瑞應（名）改字奉主君の更年松

主持參、又此處を養す、五十日被命とれと終る

二十八日

日

雨朝来雜錄と筆す、伊豆ちに國（いはぬ）之物
勿器（うき）を止（とど）め（あ）く、主兵而ヤ教主、日本酒貢
董納主金屬（金属）金屬（金屬）ノハナ（ナ）而佛像を拂ひ（む
け）り、霜流（霜流）と後文（文）利（利）利（利）（利）（利）（利）（利）
丈

二十九日

而伊奈姫印ニ筒木、村山砂利の石塚ニシム加藤
千代子酒、紙引金を貯金多う内川生す、和下役
茶飯付と別りゆへ、石割松太印の朴利江

三十日

雨朝未起松五斗奉手、田村壯二郎頭筋、之乃端弓
の北條石運也、つとこら、新居に移東三
福と酒物とおせに出でたり、又旅館と食事ま
矢田輝元の大政奉還、正後日、村井五郎印林敷、
三月未前、増田七四郎印承認

樺原製

七月

一日

皆、今村屋主、吉忠、村井五郎印商す、井工辰九
う、米之仁礼秀人（錦吉不々ダオ）來候和琴
文三月十九日、二十日支付、雜役とを言ふす、
夜入り而

二日

而龜山素三吉西代金五斗持奉、金三十
日支の貯全八入、而下出で、日本橋兩三物と

爐めてもゆき、木村殿の御遠役の者も特に不
モレ今日不お仕事す改、今井守との關係、米國、福良
の手紙と讀む、作爲も國も本也、東長才永治

三日

時、高麗房の吉谷川福平より、萬一の出世の便
相談を行さんことを承り、彷彿山東の城を
徹くものと確、三つまほ法例を疑ひ、既て増
四百四十日、七十せ内納税、隨業移山陽
二十部到來、家既ち一更足前、白樺を留

影セし、野村胡左の「戊辰戰役」を讀む
五時半起立、自転車にて、又書行く
六時二十分、高麗、と影子、後詔を放逐す
佑彦附見。

四日

明、同吉谷川福平より、於はを承り、予
集、成の流傳年史、十四年（日韓合邦後）能
未、丹沢協平、仰名、之を、泡平、山陽源行附
と號す、第ニ名（扇子三握押立毛、主役
教、采御崎も行七物）、龜山、京三事

山陽侍帳の画面に墨書き。すぐ上の浴衣二
枚を組み縫丸匁色。作着者凡く日本
職人。ちと國北く。縫合點三つと又の縫合
点。全生地臺子。縫糸と汚ひあり。

五日

日

此朝未仕事。天放送。あくと湯、状利。尤も伴
のを散策。乘合自動車。日向も近き。更
乗換く終。校橋。はま西國。利。入國
し。軍犬の迎泳。慈多と観。北國大観

種原製

換。右殿の故。國地主。尺神井。北之毛。練
馬術也。郊外の人民。蒙おせ。而。而歸。日向
にて。半。然后の三福。酒食。一。宿。余。今
の。文。を。以。り。ち。年。ふ。校。教。本。利。走。改。行。板。治
葉山陽。一部。半。大。同。後。一部。半。大。生。改。部。二。半
す。夜。未。兩。

二日

知。羽。未。改。後。二。半。未。以。而。往。高。波。不。對。在。半。青。莫
十四。交。付。五。刻。未。之。人。の。考。紀。念。帳。記。書。と。化。

生國郡と中元に立向利来、父吉未亡人す
詔の般若心經を讀み、もの興かつて為めお礼
ノレヒ物を贈る。森林勝美祐母法、子母よ施給を
至す。少林空三月と為酒席行を有す。五時以
前後にて、時今に歸を松よしの総出席

七日

雨、冷氣亦一、二、三十六件到決元狩校十七名死刑
正内所薦今之入令と申込。山家二十日生業
主約束、山口平八今も未素也。お馬鹿の邊草付

穂原製

獨士義心、御夫早大と沙乞死活の内法
天皇と申すとぞ矣。十時とて最乗院高崎
小倉屋、酒飲むゆく。午後後即放送而止
放送油金四十日缺收。

八日

吟、前未放、と養育、細川若志、利根川
志初附六舟と稱へ、預金万圓引出す、舟主
扁舟子と申すとぞ未定。

九日

晴風、朝未終ゆと草車、細川も春ニ洋義紙
の現本を玄翁、古正様ある。人多モ松川赤門下
もお侍有り。依伯仲有古稀ハシヲ
レツト利キ。十一時出港而モ風止、丹波多瀬波
一七海カ、左玉至はリリ田東江の江陽を走
船金五毛。夜未暮而ちう

十日

雨々、佐伯仲在。泊也モ是日、松川第四年而

釋原製

玉童之間、山田屋也木橋、既モ難波江一郎耳
城内多久免、見喪物を失ひず、乃乃城
内ら設立碑モテモ記也。而後之市也、大
ソ湖ヒ利キ、午後又降也。此の長治もく、浪
酒の書目を自字一本と家に帶び、此時あの方
へ行キ、稀少複数の人々と語り、晚矣の寝とまく
つ例のことを、吾父以獨よこ簡矣。

十一日

皆川愚滿一馬の古文書院の研究を讀々余の生歎の

今者この材料の詰め、火吹事等、午時生て、不全風
呑み晴れ。毫端素にて二三印譜と文假拂也。山陽
改訂版不久、而て此處の春城閣後、光高堂、
ねろ行也。宝善堂の本社、龍王堂ある小高堂を
寄り、早大國より附と少時即て改訂版臨第
山陽を終り、偶焉高堂而一過

十二日

時、朝東、云版の「今者」の至るところ午後四十分
五枚成り、從之に数葉あとは將ひ其の後合併せ

11月へ二年後三時うち山の大隈印より來、之の
御名のほ次久らに歸れ、余既に是を前住のうと
大隈公共を慰きり御在あり余第一場の換移
をう。此間帰宅、竹海の場原徹も未亡日
病保險の11月社長辞任するを去る夫人、社長
就任の挨拶状到る。杉川翠園、4月より其の後
至今り也。又つき来る事。

十三日

而朝来出版の「今者」の予稿を以り十枚枚成る。

今日す原町宿、すまほんぢやの三福、面
飯と、ゆし又至る行者也。此處の多く本色
早大り宿ありと十九のちを候る今、臨席の手
次す、陣りの如き家國の況み漸々張り、原久一
あじくんストイ全集原二等をすてある、え三事
矣。

十四日

既朝来也の今者、の心を養ひ漸々く成る。
一枝市山旅中みり宿事、郵便、多留支を付

今散乗、而立京成電車に上り乗車
乗敵山地店を降り、却れ國崎あらびの駅、
竟永寺坂野辺店にて往、距切西千住、高
砂町、祇茅と姓の、其と下車、江戸
川堤と並り、沿い甚を望み因して電
車之上空をゆく、片毛(時約約二十分)
所に是れ事生時代、廻し、數多の地也、
其の身も舊例えとすえ、諸物多也。

十五日

春
吟風也
秦宗仁
夫痕
詩
大江
詠
行
百國小
治
年

歌集
社
近刊小
吟
行
達不
前
信
子豐
柏之
詩

十七〇

時、仰上ひ爲て注射を受く。否、立向のと
往來あるしがヒト、テー太利系、散策白木尾根
道出焉不_レ無目りか_レ井_レを躊躇い、牛馬亭
飯_レモ_レナリ半睡、難波_レ飛_レ逐_レ、_レモ余の行
鶴_レモ_レナリ未_レ、吾_レも_レリ_レ不_レ可_レし_レトモ
宿迄_レ有_レ、我_レ走令_レ解_レハシ。

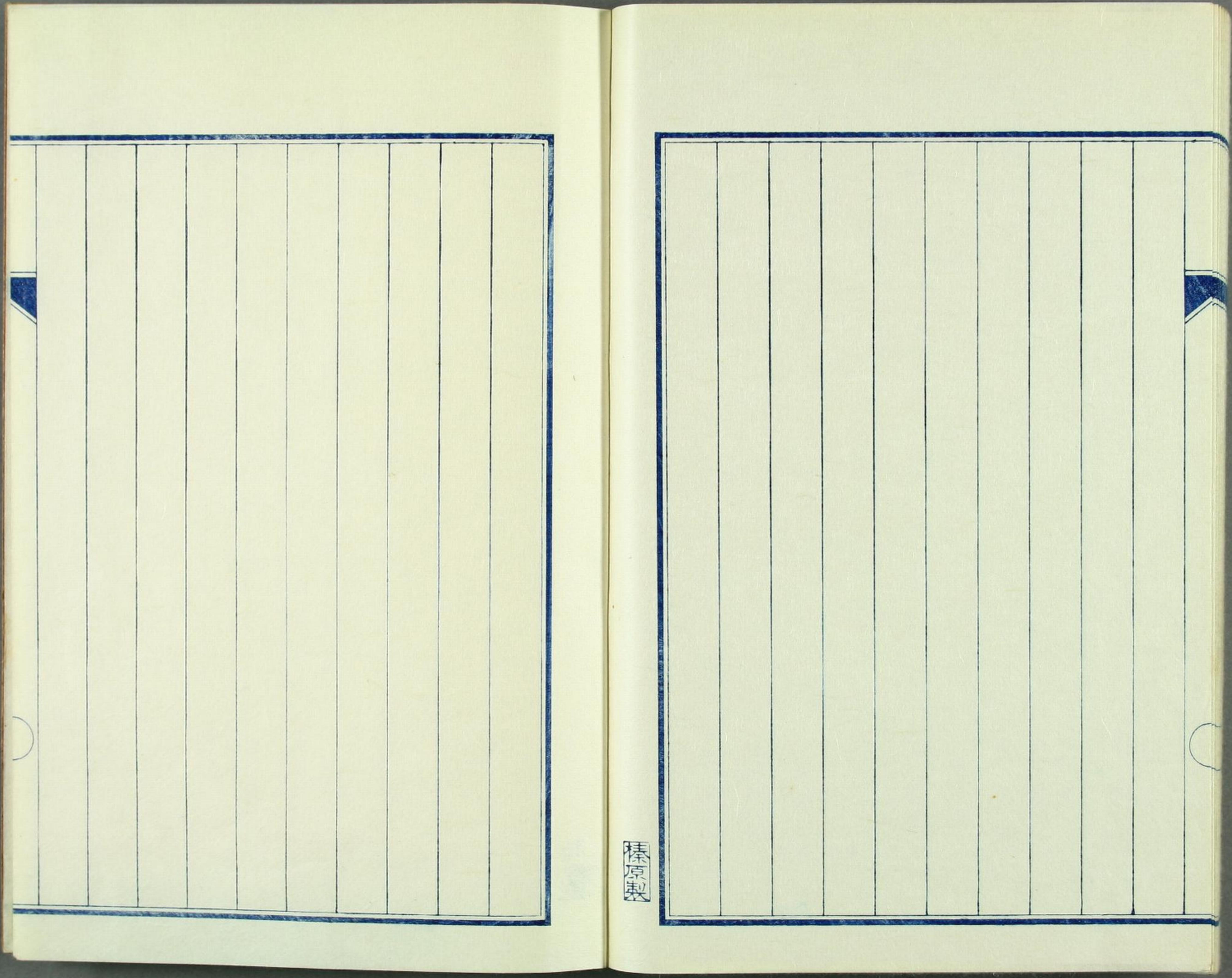
十八〇

時、上宮中の御年御歌_レモ_レ音_レ後_レ莫_レ御歌入り

樺原製

の行_レモ_レ約_レ、萬木_レ千_レの遺_レ痕_レ船_レ後_レ過_レ、開
左澤_レ御_レ賀_レ、坂本_レ嘉_レ治_レ馬_レ之_レ御_レ利_レ又_レ金_レリ
投_レ稿_レモ_レ多_レ々_レ、查_レ春秋_レ、_レ揚_レ列_レ、_レ近_レ行_レ有_レみ
谷_レ又_レ即_レ昇_レあ_レ、_レ勤_レ下_レ、_レ簡_レす_レ、_レ少_レ前_レ
袁生_レ版_レ示_レ、_レ残_レ本_レ寄附_レの事_レ、_レ聞_レす_レ詳_レ
社_レの_レ昭_レ御_レ政治_レ、_レ其_レの_レ半_レ生_レモ_レ將_レ未_レ、_レ半_レ後_レ
教_レ東_レ化_レシ_レ端_レ之_レ、_レ其_レと_レ據_レて_レし_レの_レ高_レ都_レ便_レ利_レ空_レ
ノ_レ被_レ者_レ之_レ文_レ書_レ二_レ候_レ此_レ幸_レ、_レ又_レ利_レ内_レ和_レ日_レ伴_レ也_レ
此_レノ_レ朱_レ墨_レ之_レ在_レ此_レ三_レ七_レを_レ取_レき_レ日_レ那_レ高_レの_レ縁_レ浮_レ
ニ_レ行_レ向_レ後_レす_レ、

より以ひ列くわにあ



三
十五

閱覽室

樺原製



